

編集後記

- ◇ 2012年2月27日、28日の両日、沖縄県の宮古島を訪れた。沖縄県は2010年度から県内で甘藷の奨励に着手し、宮古島もその振興対象地域の一つとなっている。甘藷を基軸に6次産業化を図り、島興しに結びつける狙いがある。筆者も宮古島市長から「宮古島産甘藷6次産業化プロジェクト推進協議会委員」の委嘱を受け、本計画の推進に協力することとなった。

約400年前に宮古島の砂川親雲上旨屋は、野國總管と並んで中国から琉球王国に初めて甘藷を伝えた功労者である。だが、宮古島における甘藷作付面積は、6haまで激減している。解決すべき課題も多いが、再び甘藷の蘇ることを信じたい。宮古島では、温暖な気候から甘藷の二期作（夏作、冬作）が実践されている。2月28日に砂川恵俊さんの甘藷圃場を見学したが、丁度、冬作の収穫期に入っており、畑一面に甘藷の開花がみられた。本誌でも追って、宮古島における甘藷振興の状況を紹介したい。

- ◇ 本誌112号の特集では、「ジャガイモの育種を考える」をとりあげた。2011年12月7日に、帯広市で開催された十勝農学談話会主催の「バレイショ育種の将来を考える」を聴講した。その内容が面白く参考となったので、その折の講師の方々に寄稿をお願いした。

かねがね筆者は、ジャガイモの新品種がこれまで数多く育成されてきたにも拘わらず、明治・大正時代に外国から移入された「男爵薯」、「メークイン」の牙城がいまだに崩れていないことが不思議でならなかった。そこにはジャガイモの育種、流通などの構造面に根本的な問題があるのではないかと考えていた。今回、「バレイショ育種の現状と課題」と題して総論をまとめていただいた保坂和良氏から、ジャガイモ育種の課題を明快に分析し、将来の進むべき育種の方途を示唆いただいた。この特集が、わが国の将来におけるジャガイモ育種の在り方検討の一助になることを願っている。

- ◇ (財)いも類振興会の平成24年度第1回評議員会・理事会が、5月24日に開催された。例年どおりの議案である「平成23年度事業報告及び財務諸表について」は、異議なく承認をえた。また、新たな議案であった「定款変更(案)について」と「一般財団法人移行認可申請書について」の重要案件も承認をえて、5月24日付けで一般財団法人への「移行認可申請書」を内閣総理大臣(内閣府公益認定等委員会事務局)へ提出することができた。

(狩谷 昭男)

いも類振興情報 第112号

2012(平成24)年7月15日発行

定価 1部 500円
年間購読料(季刊) 2,000円

発行 財団法人 いも類振興会

〒107-0052 東京都港区赤坂6-10-41 ヴィップ赤坂303
TEL 03-3588-1040 FAX 03-3588-1225
E-mail: imoshin@fancy.ocn.ne.jp
郵便振替 00130-1-110152

印刷 株式会社丸井工文社